

## 特別レポート

# 早期からの将来展望が力強い学びを推進

～「大学生のキャリア意識調査2007」(京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人 電通育英会)より

大学生の学びと成長やキャリア教育のあり方についての幅広い議論を目的とした、「大学生研究フォーラム」が、昨年スタートした。それに先立って実施された「大学生のキャリア意識調査2007」では大学生のキャリア意識を「2つのライフ」という切り口で鮮やかに読み取っている。大学生の将来設計と日常生活はどう関わるのか。調査結果を見ていく。

### 正課教育とキャリア教育の架橋を目指して

8月2日、京都大学で「大学生研究フォーラム2008」が行われた。これは京都大学高等教育研究開発推進センターと財団法人電通育英会が共催し、毎年この時期の実施を予定しているものである。本フォーラムの取りまとめにあ

たった京都大学高等教育研究開発推進センター・溝上慎一准教授は、その目的を「キャリア教育及び正課教育の在り方を検証し、その『架橋』を目指すこと」だと語る。大学現場ではキャリア教育と言

えばキャリア支援センターや就職部主体で行うものという意識が強く、正課教育を担う大学執行部や

### ●「大学生のキャリア意識調査2007」概要

- 調査の目的・着眼点
  - ・大学生の教育、キャリア形成を理解する
  - ・2種類の「ライフ」に注目する
  - ①人生としてのライフ(職業・進路選択、生き方、将来展望)
  - ②日常生活としてのライフ(学業、クラブ、サークル活動、アルバイト、ボランティア、趣味・娯楽など)
- 調査対象
  - ・全国の4年制大学、医学系、薬学系6年制大学に通う1年生・3年生
- 有効回収数
  - ・大学1年生988人、大学3年生1025人

教員陣の問題意識はまだあまり高くない。しかし、溝上准教授は「学生の成長を考える時、正課教育の改善、発展こそがキャリア教育につながります」と言い切る。08年3月に中教審大学分科会から出された「学士課程教育の構築に向けて」でも、大卒者の質の維持と向上への指針として「学士力」が打ち出されていた。これは大学の正課教育の中で、「知識・理解」や「態度・志向性」などとともに「汎用的技能」(generic skills)・コミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力)などの技能育成を求めている。その背景には、産業界が採用時にエンプロイアビリティやコンピテンシーを重視してきたことがある。知識基盤社会での人材育成が大学に求められるようになってきたのだ。



溝上慎一  
京都大学高等教育研究開発推進センター准教授

「教育は知識・技能・態度を育てる営みです。大学の学問や知識は抽象的・体系的であり、それ自体が社会に出てすぐに役に立つことは少ないのですが、学問を媒介にして思考力や判断力、認識力、他者への共感性やコミュニケーション能力などの技能、態度を養えます。つまり、知識を学ぶプロセスに学生が将来につながる成長の種があるのです」(溝上准教授)。

本フォーラムでは、キャリアセンターなどが持つ専門性や役割を再確認するとともに、正課教育でのキャリア教育の接続の可能性を

探るなど、両者をつなぐ実効性のある議論を目指している。

### 人生設計と日常生活の「2つのライフ」に着目

以下ではフォーラムと連動して実施され、議論の中心になった「大学生のキャリア意識調査2007」(以下、調査)を詳しく見ていく。これは全国の4年制大学、および医学系・薬学系6年制大学に通う1年生・3年生を対象に、「大学生のキャリア意識やキャリア教育、キャリア形成支援」を把握するために、3年に一度のサイクルで実

施されるものである。

調査の目的を溝上准教授は「学生が大学教育を受けて、どのように学び、成長しているのかに焦点をあわせる。さらに調査結果を多様な人々が議論して課題を抽出してもらい、新たな議論につなげようと考えました」と説明する。興味深いのは、学生たちのキャリア形成を理解するために「2つのライフ(Life)」の関連性に着目した点である。ライフには「日常生活」と「人生」という2種類の意味がある。「日常生活」としてのライフには学業やクラブ・サー

クル活動、アルバイト、ボランティア、趣味・娯楽など、正課、正課外での活動など大学生生活全般が含まれる。他方、「人生としてのライフ」は職業・進路選択、生き方、将来展望などの人生設計を指す。

「従来の大学生調査は、『日常生活としてのライフ』に力点を置き、キャリア形成支援は、『人生としてのライフ』に力点を置いていました。両者が同時に扱われることは少なかったように思います。広い意味でのキャリア形成支援を考えるとときには、学生理解の視点の中に日常生活としてのライフと人生としてのライフの両方を含みこんで理解することが必要です」。

溝上准教授は大学生へのインタビューなどで「将来を思い描いても何もしていない」学生に多数出会った。日常生活の中で将来に関わる時間軸をどう伸ばしていくのか、が課題だと感じてきた。そこで今回の調査では、「2つのライフ」をつなげるものが何かを明らかにすることも狙いとされていた。

### 人生設計に大きく影響する中高での進路指導

それでは調査の結果を見ていく。

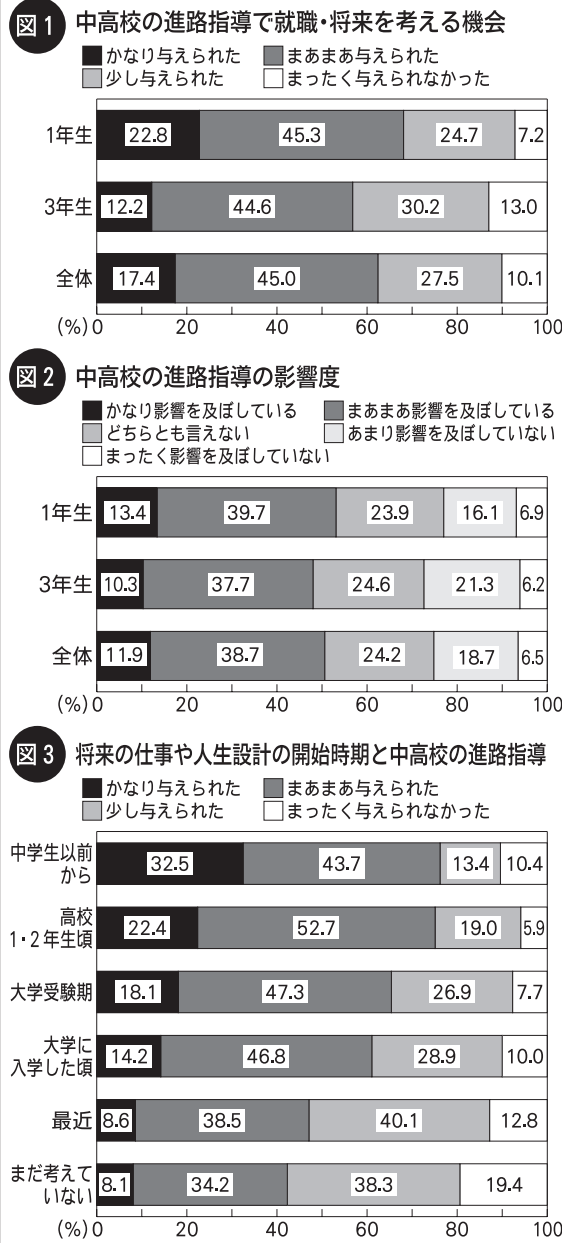


図7 大学生生活の重点

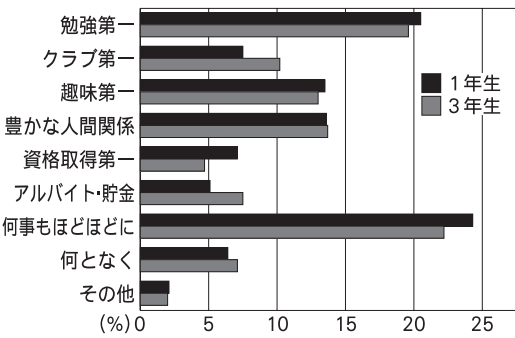


図9 将来の見通しの実現への理解と実行と参加型授業への参加

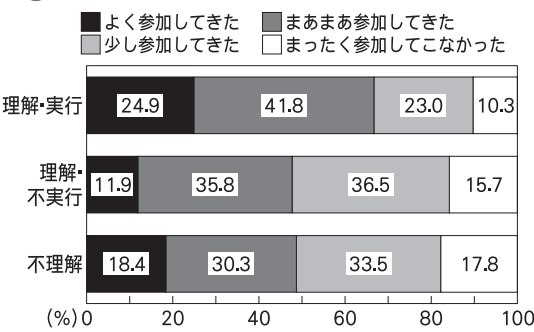


図8 将来の見通しの実現への理解と実行と大学生生活の重点との関連

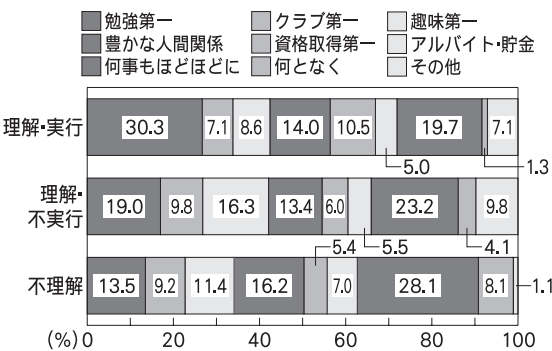
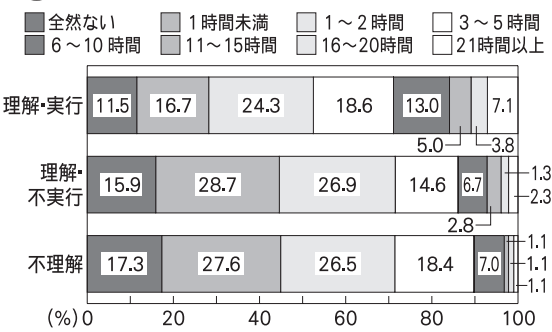


図10 将来の見通しの実現への理解と実行と1週間の過ごし方の「授業とは関係のない勉強」との関連



な人間関係」などとなっている。次に図⑧で「将来の見通しの実現への理解と実行」と「大学生生活の重点」との関連を見ると、「理解・実行群」では、大学生生活の重点を「勉強第一」としている人が最も多く、30・3%だった。他の2群（「理解・不実行」「不理解」群）では「何事もほどほどに」が最も多く、「不理解群」では2番目に多く見られたのは「豊かな人間関係」である。「2つのライフの形成が、大学生生活観、しかも学業と密接に関連していることを示すものです」と溝上准教授は分析する。興味深いのは、「大学での学びの目的」を問う25項目の質問のうち、「なりた職業や資格のため」「高い専門性を身につけたいから」「自分自身が関わった活動や仕事に関する事柄を学びたいから」など勉強を目的とする問いに対し、「理解・実行群」で得点が最も高く、「不理解群」で得点が低いといった有意差が生じたことである。ちなみに「いろいろな人と出会える」「人間関係が豊かになる」「視野を広げたい」などの項目では有意差は見られていない。

これらについて溝上准教授は「2つのライフの形成には、将来とのつながりを見据えた勉強をしていること、あるいは自分の将来にとって日々の勉強が何であるかを理解できるような意味づけの作業が必要だということを示しています」と解説する。漠然と与えられた勉強をこなすだけの学生には、2つのライフをバランスよく形成するのは難しいのである。

**将来の見通しの差は日常生活に大きく影響**

将来の見通しの実現を理解し、実行しているかどうかは、日常生活に顕著に現れている。

例えばゼミナールや演習などの参加型授業への参加は、「よく参加してきた」「まあまあ参加してきた」が48・5%、「少し参加してきた」「まったく参加してこなかった」が51・5%だが、「将来の見通しの実現への理解と実行」に関連づけると(図⑨)、「理解・実行群」は「よく参加してきた」「まあまあ参加してきた」が66・7%であるのに対し「理解・不実行群」は47・7%、「不理解群」48・7%に留まった。

また、「1週間の過ごし方」の

図4 将来の見通しを持っているか

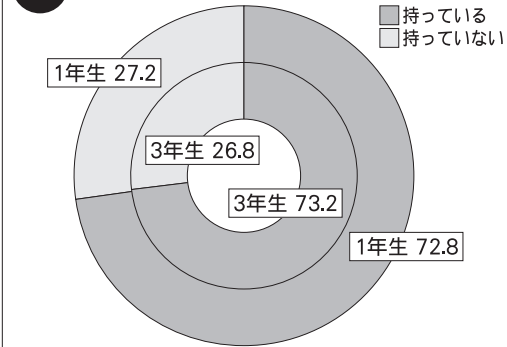


図5 将来への見通しの実現への理解と実行 (見通しを持っている者)

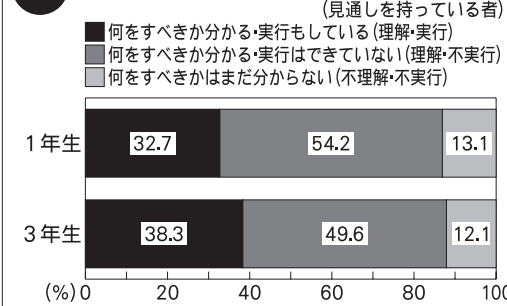
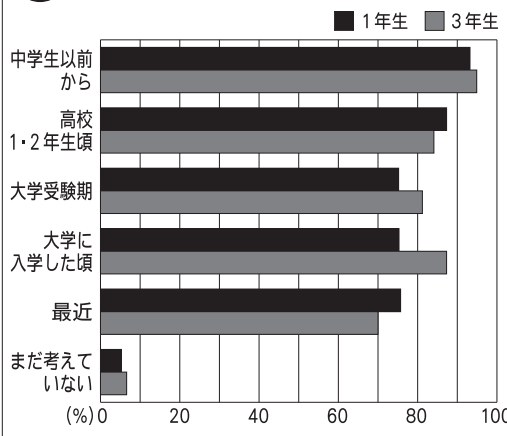


図6 将来の仕事や人生設計の開始時期と「将来の見通しを持っている」割合との関連

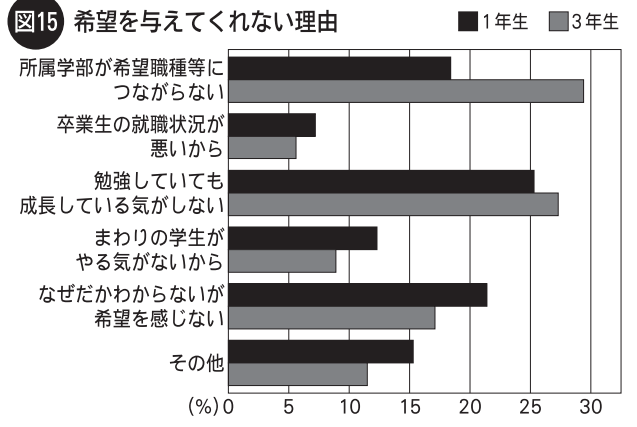
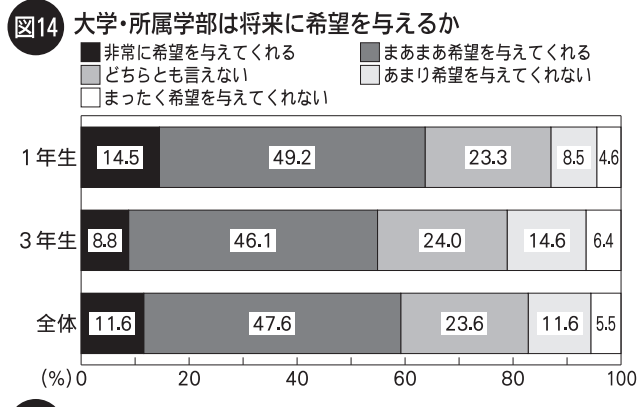


「人は人生設計を開始してすぐに将来の見通しを持てるようになるわけではなく、多くの者が安定して将来の見通しを持てるようになるには、2~3年必要とするということが見えてきます」と溝上准教授は分析する。大学入学後に将来を考えよう、という姿勢では、将来の見通しが立たないままに就職活動に突入していくことになる。

**いい形で勉強する人がいい形で将来を形成する**

2つのライフをバランスよく形成し、将来の見通しを実現しようとする学生たちの特徴は何か。まず図⑦で「大学生生活の重点」を見ると、1年生、3年生ともに「何事もほどほどに」との答えが最も多く、次いで「勉強第一」「豊かな人間関係」などとなっている。





ただし、大学での勉学による成長を近視眼的に捉えるべきではないと溝上准教授は釘を刺す。「学問の意義を学生に説くのはたやす

く、そうした視点が必要だと感じました」と溝上准教授は語った。それでは学生たちが「2つのライフ」をつなげるために、大学が取るべき方策は何か。溝上准教授が提唱するのは「学生研修」である。欧米の大学の「学生エンゲージメント (student engagement)」から参考にしたもので、大学側が授業だけでなくクラブや友人関係なども含めて、学生のキャンパスライフ全体を充実させるべく、様々な活動を促すというものだ。

最後に今回の調査結果などを踏まえ、高校で考えるべき視点について溝上准教授にたずねた。すでに見たように、高校での進路指導は、その後の将来設計に非常に重要な意味を持つ。そこで高校生のレベルで構わないので、将

**高校の教科教育でもキャリア形成を意識する**

最後に今回の調査結果などを踏まえ、高校で考えるべき視点について溝上准教授にたずねた。すでに見たように、高校での進路指導は、その後の将来設計に非常に重要な意味を持つ。そこで高校生のレベルで構わないので、将

学生研修に加えてもう一つ考えている方策として溝上准教授が挙げたのが「単位の実質化」である。これは授業で課された課題やレポートなどを授業以外の時間にまとめ、次の授業で議論し、発表するというように、「講義+演習」など週2〜3コマ程度の授業を設けるもので、すでに東海大学や創価大学などで試みられている。「勉強している学生のイメージを変えていかないとけません。授業・授業外でバランス良く勉強している学生が色々な意味で成長しているというのは、今回の調査に限らず、複数の調査からも出てきています。勉強する学生が成長する」というイメージを、もっと広く根付かせたいですね。調査を振り返り、溝上准教授はこう強調した。

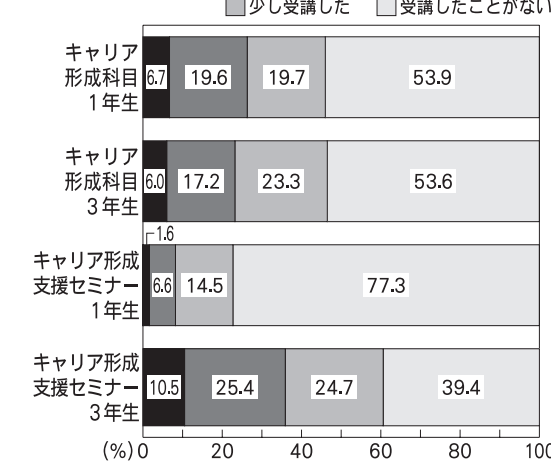
来設計を行う機会を設けることが大切になる。「大学入学後いろいろな世界を知って、価値観が変わったり崩れたりすることは多々ありますが、それは全く問題ありません。変わるためには基盤、足場がなくてはならない。足場がなければ見通しが崩れても立て直すことはできません(溝上准教授)。

次いで、高校でも「2つのライフ」を結び付けるような教科教育での取り組みを行う必要性を溝上准教授は指摘する。「単に教科の『知識』を教えるだけではなく、例えば課題を通して物事にじっくり取り組むなど、各教科での学習を通して『技能・態度』を育てることは、必ず生徒のキャリア形成につながると思われれます」。

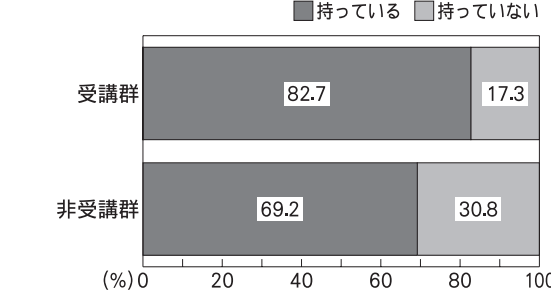
本フォーラムでも広島県のある高校で教科と連携した「総合的な学習の時間」でのキャリア教育が報告されていた。このように教科教育をキャリア教育につなげるという視点は、今後の高校教育の在り方を考える上で、示唆に富むものだと言える。(なお、調査結果の詳細は <http://www.dentsu-ikeikai.or.jp/>参照の))。

(取材・構成/福永文子)

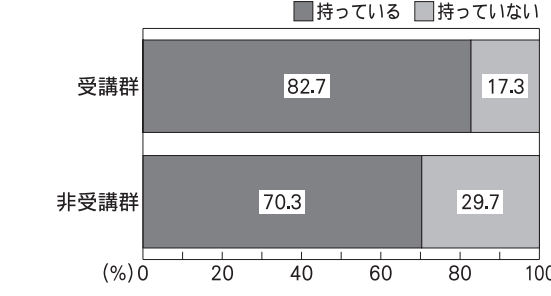
**図11 キャリア形成科目・キャリア形成支援セミナーへの受講状況**



**図12 キャリア教育受講群・非受講群における将来の見通しの有無との関連(1年生)**



**図13 キャリア教育受講群・非受講群における将来の見通しの有無との関連(3年生)**



うち「授業に関係のない勉強」の時間を図⑩で見ると、「週6時間以上」は「理解・実行群」で28・9%に対し、「理解・不実行群」13・1%、「不理解」10・3%だった。一方、「全然ない」「1時間未満」は「理解・実行群」が28・2%に対して、「理解・不実行群」44・6%、「不理解群」44・9%に上っている。

よく重ね合わせながら大学生活をデザインできている学生が、いい人生形成を行っているのである。将来の見通しの有無はキャリア形成科目などへの受講状況にも表れている。例えば図⑪でキャリア形成科目の受講状況を見ると1年生は46%だが、図⑫で将来の見通しとの関連を見ると、受講群の82・7%は「将来の見通しを持っている」と答えている。非受講群は逆に「将来の見通しを持っていない」との答えは69・2%に下がる。「授業としてのキャリア形成科目に参加するには、学期初めに計

画的に履修することが求められるため、長期的なスパンで自らのキャリアを形成しようとする態度や構えが必要になります。ここにも将来への明確な意識の違いが現れてきます(溝上准教授)。

**学生の成長をどのように支えていくのか**

次に調査を通じて現れてきた大学教育の課題について見てみよう。まず図⑭「大学・所属学部は将来に希望を与えるか」を見てみると、1年生は「希望を与えてくれる(非常に希望を与える)」が最も多く、次いで「勉強していても成長している気がしない」となっている。これらについて溝上准教授は「自分が成長している気がするかどうか」が、大学への満足度に結びついていることは興味深いことです。理工系や医・歯・薬系など、将来に直結する学部とそうでない学部との違いは差し引いて考えなくてはいいませんが、大学人にとっては『何を教えたのか』が問われる結果だと思えます」と指摘する。先述した「学士力」とも絡み、学士課程教育の課題が浮き彫りにされた形だ。

まあまあ希望を与える(図⑭)で63・7%なのに対し、3年生は54・9%となる。逆に「希望を与えてくれない(あまり希望を与えてくれない+まったく希望を与えてくれない)は1年生で13・1%。3年生は21%と5人に1人は大学に希望を感じていないと答えている。図⑮で「希望を与えてくれない理由」を見ると、1年生で最も多かったのは「勉強していても成長している気がしない」、次いで「なぜだかわからないが希望を感じない」。3年生では「所属学部が希望職種等につながらない」が最も多く、次いで「勉強していても成長している気がしない」となっている。これらについて溝上准教授は「自分が成長している気がするかどうか」が、大学への満足度に結びついていることは興味深いことです。理工系や医・歯・薬系など、将来に直結する学部とそうでない学部との違いは差し引いて考えなくてはいいませんが、大学人にとっては『何を教えたのか』が問われる結果だと思えます」と指摘する。先述した「学士力」とも絡み、学士課程教育の課題が浮き彫りにされた形だ。